

# 野の 寂しさ

・ブラームス歌曲

短編

YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo - Yamanka

# 野の寂しさ

---

山中與隆

# 目次

野の寂しさ

1

編者あとがき

101

# 野の寂しさ

作 山中與隆

若山幸太郎は『これが最後の演奏会かな』と感じた。しかしその思いとは関係なく楽屋前の廊下にはいつものように顔見知りの常連客たちが挨拶に来て、「素晴らしかった」

「良かった」

「感動しました」

「また聞かせてください」

「先生のチェロの音は最高！」

「ピアノの瀬野さんとのアンサンブルもいつも素晴らしいわ」

などと賞賛の言葉が際限も無く浴びせかけられる。幸太郎はそれらの言葉を半ば上の空で聞きながら、

顔には笑みをたたえて、

「ありがとう」

「それほどでもありませんよ」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

「そうでしたか」

などと習慣になっているように言葉が出てくる。そして

「あさつてが楽しみですわ」

と言う声を残して客達は帰つて行つた。「あさつて」というのは、常連の人たちが催してくれる『フアンの集い』として、幸太郎が演奏する小さなコンサートと食事の会があるのだ。

幸太郎はコンサートの休憩のときに『とうとう年貢の納め時が来たか』という思いがしつこく頭に去来したのだった。一月くらい前から急にこれまでのように弾けないと感じていた。しかしそのたびに

「ただ調子が悪いだけだ、

「練習が足りないためだ」

と自分を騙しながらやって来た。基礎的な技術をも  
う一度チェックし直すことも考え、時には実行もし  
た。

しかしこの日は、前半を弾き終えただけで全身に  
ドツと疲れが出てきた。演奏中ずっと、思うように  
弾けないことと闘い続けたことによる疲労感だった。



汗の量はいつもより多く、全身を乾いたタオルで拭いた。しかし拭いたあと汗で濡れたものをもう一度着るのは不快だったので幸太郎は、演奏会終了後のために用意していた下着を、ここで使った。後半に汗をかいても、着替えは無い。こんなことはこれまでになかった。後半が始まる時には重い体をやっとの思いで持ち上げる感じだった。

この日は、大曲を前半に演奏し、後半に小品を並

べるプログラムにして良かったと思つた。後半の初めはフォーレの《エレジー》《夢のあとに》《シチリアーノ》とポピュラーなチェロの小品を弾いた。敢えて後に行くほど明るいい曲になるよう並べた。幸太郎がよくするプログラミングだ。そして最後に《子守歌》などブラームスの比較的よく知られた歌曲をチェロ用に編曲したものを三曲弾いてコンサートを閉じたのだつた。いつものようにアンコールの拍手

が続いた。『今日はアンコール無しにしたい』と幸太郎は強く思った。こんな気持ちはめったにない。何年も前に一度、酷く調子が悪くて思うような演奏ができなかつたときに、同じような気持ちに襲われ、そのときは実際にアンコール演奏をしなかつた。

拍手は鳴り止まず、舞台袖でも関係者たちが

「お願いします」

と拍手しながら何度も舞台に送り出す。しかたなく、

幸太郎は舞台袖の台の上に置いた楽譜の中から一冊の薄い楽譜をとると、それを

「これにしましょう」

と言つてピアノの瀬野に渡した。ブラームスの《野の寂しさ》という歌曲だ。瀬野は微かに頷いて黙つてそれを受け取つた。幸太郎は瀬野を促して舞台に出た。二人とも舞台の光の中に出ると、くたびれた顔は一切見せず、無意識に笑顔になる。これは職業

上身についた習慣である。

二人が椅子に座ると拍手は静まった。幸太郎は客席奥の天上に視線をやつてしばらくこれから弾く曲のイメージを手繰り寄せていたが、瀬野の方に

「お願いします」

と言うように少し顔を向けた。ピアノが静かに前奏を弾き始めた。《野の寂しさ》は、『草に覆われた野原に一人でいると、自分の魂が青空に浮かぶ雲と共

に、彼方に渡っていくようだ』と歌うブラームスの  
円熟期の歌曲で、そのゆつたりとしたメロディが向  
いているのか、チェロで演奏されることも珍しくな  
い。

静かに弾き終わると、また大きな拍手が起こり、  
小さなホールだが

「ブラボー」

の声までかかった。幸太郎と瀬野は二度ほどカーテ

ンコールに応えた後、

「終わりにしましょう」

と言つて、それぞれ自分の楽屋に戻つた。一休みしているところ、常連のファンたちが楽屋前の廊下に押しかけて来たという訳である。

祝福の客達が帰つたあと、会場で聞いていた幸太郎の妻紗枝子が楽屋に入つてきた。紗枝子は、

「調子が良くなかったの？」

と聞いた。

「やっぱりわかったか。何故か全然気分が乗らないし、ミスも多かったね。もつとも最近はミスだらけだから珍しくも無いか」

と、幸太郎は、深刻そうな顔は見せずに言った。

「でもアンコールは良かったわ。コンサート全体でも一番良かったくらい。聞いていてゾクゾクしたわ。」



本当よ。それに《エレジー》も良かったかな」

紗枝子は、いつもこうして忌憚無く感想を言う。

幸太郎もそれに慣れていて、良い感想も良くない感想も素直に聞くことにしている。幸太郎は、紗枝子の演奏の良し悪しを聞き分ける能力を高く買っている。だから紗枝子はたいてい舞台袖ではなく、客席で聞くことにしている。

「アンコールの《野の寂しさ》は、今日唯一素直に

気持ちに乗せて弾けたよ」

そのとき楽屋の戸が少し開いて、ピアノストの瀬野が顔だけ覗かせて、

「お先に失礼します」

と言った。

幸太郎が、

「ありがとうございます。じゃ、また」

と言ったが、瀬野は幸太郎の言葉が終わらないうち

に、戸を閉めて帰っていった。

幸太郎は家に帰ってからも気分が冴えなかった。

一日置いて小さなコンサートがある。「フアンの集い」である。プロの演奏家にとつては大事にしなければならぬ、有難い行事だ。幸太郎はそれに出たくないと思つた。紗枝子にそのことを漏らしてみたら、やはり

「いまさら病気でもないのにキャンセルできないで

しよ」

と言う返事が帰ってきた。

翌日になつても「フアンの集い」で演奏する曲の練習をする気分になれない。長年演奏活動をしてきた幸太郎にとって、コンサート前の練習は、気持ちをコンサートに向けていくための大切な儀式なのである。

昔何かで、ある人間国宝の

「仕事場に就くことを仕事とする」

という言葉を読んで以来、これを座右銘としている幸太郎は、一応練習室に入った。しかし楽譜を前にして何もする気になれないでいると、紗枝子が電話の取次ぎに来た。ピアニストの瀬野からだと言う。幸太郎が居間に行つて受話器を取ると、

「瀬野です。昨日はお疲れ様でした」

と言つた後、しばらく間をおいて低い声で話し始め

た。

「実は私、今度ファイルハーモニーのメンバーに誘われてピアノトリオのシリーズを始めることになったのは、お話ししましたよね。それが結構ハードなスケジュールである上に、練習回数をしつかりとつてレベルの高いものにしたということなのです。それで、トリオの方に精力を集中したいと思ひまして、昨日のコンサートを最後に先生とのコンビを解消し

たいと思ひまして、お電話したのです」

昨日一日顔を合わせていたのだから何故そのとき話さなかつたのかと、幸太郎は思ったが、昨日の自分の演奏が余りに酷かつたので、そんなことを急に言い出したのかとも思った。幸太郎の返事が遅かつたので瀬野が返事を急かすように、

「急なので驚かれたかもしれませんが、了承していただけるでしょうか」

「瀬野さんも考えがあつておつしやるのでしようから、了承しないと云うわけには行かないでしようが、どうして急にまた……。ですが再来月の文化センターのコンサートは、やっていたただけるのでしようね」

明日の「フアンの集い」はバッハの《無伴奏チェロ組曲第一番》と小品で、小品のピアノ伴奏は妻の紗枝子がすることになっているので、瀬野は関係な



い。

「それなんですが・・・」

瀬野は言いにくそうに、

「それもキャンセルさせて欲しいのです」

「でも、もう曲目まで決まってるんですよ。そろそろチラシも出来てくる頃ですし」

「わかっています。申し訳ありません。チラシやチケットの作り直しの費用は持たせていただきませす。」

それから、もしよろしかったら代わりのピアノの方をご紹介してもいいと思っております」

瀬野はそうしてまで、自分と演奏したくないのかと幸太郎は思った。そこまで言う瀬野に無理やり約束だからと言って出演させてもいい演奏会は出来ない。しかし幸太郎は、直ぐに引き受けてくれるピアノストを思い浮かばない。

「では、そのピアノストと言う方を紹介していただ

きましようか。紹介していただいた方とするかどうかは一度合わせなどをしてから決めさせてください

「わかりました」

幸太郎は昨日リハーサルからずっと、瀬野が不機嫌にみえたことを思い出した。その不機嫌さも幸太郎が演奏に気が乗らなかつた原因の一つだったのだが、幸太郎は演奏の失敗を絶対に人のせいや状況の

せいにしてない演奏家だった。幸太郎は、瀬野の電話の話をそのまま紗枝子に話した。それを聞いた紗枝子も一緒に腹を立てるかと思つたが、紗枝子は意外にも冷静だった。

「仕方ないわね。去るものは追わずね」

「あんたは、瀬野君がどうしても急になんかことを言ひ出したのか考えないのか。それも電話一本でだよ。何年一緒にやってきたと思つてるんだ」

瀬野と幸太郎はここ十数年ピアノが必要なときには必ず共演して来た。特に初めの十年くらいは蜜月状態だった。二人で次々とコンサートを企画してきた。晩年と言える年齢になって幸太郎にとって、瀬野とコンビが組めたことは幸運だった。幸太郎の演奏家人生で最も充実した楽しい時期だったと言える。

幸太郎と瀬野が出会ったのは、あるセミナーの講師として依頼を受けたときであつた。幸太郎は、少

なくとも国内ではある程度名の知られたチェリストであつたのに対して瀬野は芸大を出たばかりのコンサート経験も浅いピアニストだったが、国内の大きなコンクールで優勝してから注目されていた。それもあつてセミナーの講師に抜擢されたのだつた。

幸太郎は同郷であることに加えて、音楽に対するコンセプトが非常にマッチしていると感じて、共演者として一緒にやっけていくことを、自ら申し出たの

だった。

幸太郎はプログラムで、瀬野のことを「伴奏者」ではなく、必ず「共演者」あるいは「デュオ」と書くことにしていた。このデュオは地元では、心に響く演奏を聞かせる数少ない演奏会として徐々に評判になっていった。

幸太郎は芸大卒業後まもなくヨーロッパのオーケストラで主席を勤めるなど外国暮らしが長かった。

帰国してからも国内の地方オーケストラの主席を勤めたりした。オーケストラを定年で辞めてから郷里に帰って、小さなコンサートでも自分の音楽が自由にできる演奏を求めて活動を開始したのだった。

セミナーでの瀬野との出会いはそれから間もなくのことだった。だから地元では瀬野以外のピアノストと共演したことは数えるほどしかない。地元のピアノスト事情に詳しくなかつたのだ。妻の紗枝子は



私的なコンサートのおきに共演するか、たまたに幸太郎のところに来たレッスン生が仕上げ段階に入ったときに、伴奏をつけるくらいしかしていない。彼女も芸大を出ているが、学校を出てまもなく幸太郎と結婚して、演奏活動はせずに主婦として何十年も幸太郎の海外生活を支えてきたので、今ではアマチュアに毛の生えた程度と言つていい。

地元でのコンサートの評判につれて瀬野の室内楽

ピアノストとしての評価も高くなり、地元のプロオーケストラであるフィルハーモニーのメンバーから室内楽に誘われるまでになったのである。

瀬野から電話があつた日の午後、幸太郎は気持ちを鎮めて、紗枝子と翌日のプログラムの合わせをした。予定しているプログラムは、バッハの無伴奏の他は昨日とは違ふ曲ばかりで《白鳥》《愛の喜び》それに日本の歌を三曲ほど弾く。幸太郎はもしアンコ

ールされたら、昨日と同じ《野の寂しさ》にしたいと考えていた。《野の寂しさ》は紗枝子と合わせたことがなかったもので少し丁寧に練習した。

一応コンサートに向けて気持ちを整理した幸太郎だったが、瀬野のコンビ解消宣言は相当こたえていた。いくら紗枝子が、

「去るものは追わず」

と言つても、とてもすすきりした気分にはなれない。

瀬野が断つてきた理由を、幸太郎は自分の演奏が瀬野にとって共演に耐えないほど駄目になってしまっていると思わずにはいられなかつたのだ。ただ自分の演奏がどれほど駄目かは、自分ではわかりにくいものだ。演奏に気が乗らないとかミスとかは自分でよくわかるが、ミスは誰にでもあるものだし、瀬野にだってある。幸太郎とてアマチュアのようにミスばかりしているわけではない。ところが演奏全体

として、聴衆をどの程度惹きつけたのかは、聞いた人たちの意見も聞かないと客観的には判断しにくい。

幸太郎が自分の演奏に異常を感じたのは、一月ほど前のある練習のときである。その日は、地元的美術館が定期的に行なっているクラシックのライブに出演を依頼されて、臨時の編成による弦楽四重奏の練習をしていた。メンバーは、幸太郎以外はフリー

で活動している若い女性三人であつた。ベートーヴェンの初期の弦楽四重奏曲第六番をメインに、小品を数曲というプログラムだ。本番までに三回集まることにしていたが、その一回目の練習のときであつた。ベートーヴェンの第六番の四重奏曲はアマチュアもよく取り上げるもので、特に難しい曲ではない。ただ第三楽章のスケルツォにちよつとトリツキーな仕掛けがあつて、誰もが戸惑う箇所がある。とくに

アマチュアは速いテンポで長く続くシンコペーションの箇所を弾かなくてはならないところが上手いかない。テンポがゆっくりなら誰にでも出来るのだが、ベートーヴェンの指示はヴィヴァーチェで、かなり速いテンポが求められている。幸太郎はこの曲が好きで何度も、いや何十回も演奏してきた。特にヨーロッパ時代には所属しているオーケストラの間と、いつも四重奏を楽しんだものだった。四重奏

のコンサートもしばしば行つた。それだけでなく自分達で楽しむときは、メンバーの誰かの家に集まつて、四重奏曲の楽譜を山のように積み上げて、ときどき休憩してワインを飲みながら一晩中弾いたものだ。時にはその中にアマチュアが一緒にすることもあつた。そういう時、そのアマチュアがこの曲では結構苦勞していたことを覚えている。

幸太郎はいまここに差し掛かつたとき、昔アマチ



ユアが混じって遊んだときのことを思い出した。一  
緒に遊んだアマチュアは大変苦勞して、何回やり直  
しても上手く行かないので、ここだけはゆっくりに  
して通り抜けたこともあった。しかし今は四人のプ  
ロの演奏家が練習しているのだ。それなのに幸太郎  
だけ、リズムが混乱して何処をやっているのかわか  
らなくなってしまう。

「申し訳ない」

と言つて幸太郎は一度テンポを落としてやつてもらつてから、テンポを戻して何とか通り抜けた。テンポを戻したとき幸太郎はやはり頭が混乱していたが、誤魔化しながら通り抜けたのだつた。周りで弾いている人たちは、幸太郎の誤魔化しはわかつていたはずである。

最後に全曲を通してみようと最初に戻つたとき、第一楽章の冒頭でも、チェロが速い動きに変わると

ころでテンポが取れないで躓いてしまった。若い三人は、大先生いつたいどうしてしまったのかと心配顔だ。大先生は、

「大丈夫、大丈夫。なんか今日はおかしいね。次の練習までにはさらっておきます」

と言つてその場をしのいだ。若いお嬢さんたちも、

「先生、次回もよろしくお願いします」と元気に言つて帰つていった。

しかし幸太郎はショックだった。第三楽章の速いシンコペーションのところも、これまで難しいと感じたことはなかった。これまでは幸太郎が、

「一応合っているが、もつとりリズム感を出さないと駄目だよ」

などと他のメンバーに注文するくらいだったのだ。それどころかこの日は第一楽章でさえ、テンポを見失った。これは明らかに練習不足というような問題

ではなさそうだ。何か身体か神経に変調をきたしている。

ところが一週間後の二度目の練習では、何の問題もなく弾けた。若い人たちも、

「先生、先週はなんだったんですか？ 私たちが細かいところを誤魔化してないか試したんじゃないですか？」

と冗談を言うほどだった。幸太郎も一緒に笑っている。

たが、勿論本人はみんなを試すためにわざと間違えたのではない。

四重奏の演奏会は、本番がすむまで何の問題もなかった。単なる一過性の変調ならいいがと、幸太郎は願いながら医者に行ったりはしなかった。

しかし今回、瀬野と共演した演奏会で、幸太郎は四重奏の練習のときの変調に似た不調に襲われたの

だ。急なテンポの変化に対応できなかつたり、知り尽くした曲なのに何小節かの休みのあと出られなかつたりと、これまでの自分には考えられないようなことが何度も起きたのである。それは本番で起きた。本番は長年の経験で何とか誤魔化しながら乗り切つたが、瀬野はすべて気付いていたはずである。

それまでは高齢にもかかわらず若々しい演奏で聞くものに感銘を与える演奏家とされてきた幸太郎で

ある。たしかに七十五歳は、病気などなくともプロとして活動するには潮時と考えてもおかしくはない年齢だ。幸太郎の中では『とうとう来たか』という気持ちと、『まだもう少しはいけるだろう』という気持ちとが揺れ動いていた。それにしても『どうして急に調子がおかしくなったのだろうか』という疑問とが錯綜していた。



フアンの集いは一応滞りなく終わった。しかしここでも幸太郎にとって気にかかる発言がある常連の一人からあつた。

「先生、おとといからの連続でお疲れじゃないですか？先生は私たちの宝物ですからお体を大事にしてくださいよ」  
と優しい声を掛けられたことだ。

帰り道、自ら運転する車の中で、幸太郎は紗枝子

に聞いた。

「やはりくたびれたような演奏だったようだね」

「私はそうは思わなかったけど。もしかしたらあの方、おとといの演奏のこと言ったのじゃないかしら」

「一週間くらい演奏ないから、一度精密検査でも受けてみるか」

「そうですね、ずいぶん何の検査もしてないから、人間ドックがいいかしらね」

その晩、幸太郎は床に入ったとき激しい眩暈がした。仰向けに寝たときにしばらく天上が回るような眩暈だった。しかしそれは十五秒か二十秒で治まった。しかし、しばらくして寝返りを打つとまた眩暈に襲われた。それも間もなく治まったので、紗枝子には何も言わなかった。

ところが翌朝起きたときに、いつものようにサツと立ち上がったたら眩暈でふらついて倒れそうな感じ

がした。慌ててそばにある箆笥に掴まった。それを  
見た紗枝子が、

「どうしたの。直ぐ人間ドックに行きましよう」  
と言う。幸太郎もそう思ったが、そのときのふらつきも直ぐに治まったので、その日は病院には行かず、  
普段どおりに過ごした。

幸太郎は総合病院の人間ドックに申し込み、運良

く三日後には二泊三日の検査入院をした。幸太郎はまず気になっていた耳鼻科を受診し、そのあと循環器科、脳神経外科など一通りの検査を行なった。その結果特に異常は発見されなかったが、MRI検査で小さな脳梗塞があることがわかった。担当した医者の所見では、梗塞はそう古いものではないと言う。すぐに問題にするほどのものではないが、入院して治療する選択肢もあるがどうするかと言われた。眩

暈の方は耳鼻科で良性突発性頭位変換性眩暈と言われ、これは

「必ず治ります」

と明言されたので安心したのだが、脳神経外科でもふらつきは無関係ではないかもしれないと言われ、幸太郎は紗枝子に強く勧められて早速入院することにしたのだった。

入院は当面二週間と言われたので、その間にある

小さな演奏と、受け持っているある新聞社の文化講座、引き受けていたレッスンをキャンセルした。入院はしたが特に重病というわけでもないのので、幸太郎自身も紗枝子も深刻には考えなかつた。

入院して行かう治療は、一日二回の点滴をして一週間ごとにMRIで脳の検査をするだけである。ほかにもこまごました検査はあるが、入院生活はいたつて退屈なものだつた。しかし問題は、この治療で自

分の演奏が元に戻るとは、幸太郎には思えなかつた。ベッドで横になつたり、休憩室に行つて新聞を読んだりしていても、幸太郎の頭から離れないのは、演奏家人生が終わるのだらうかという問題であつた。

紗枝子は、

「何時かは引退するときが来るのだから、それならそれでのんびりした余生を送ればいいじゃない。年がら年中演奏や何やらがあつて、ゆつくり二人で旅



行したことも無かつたじやない」

と、むしろ引退を心待ちにしていると言わんばかりである。しかし、演奏によつて世間から認められてきた幸太郎は、紗枝子のようには考えられなかつた。チエロあつての幸太郎である。それがなくなることは、幸太郎そのものがなくなることを意味していた。

まずピアノストの瀬野が背中を向けた。一緒に四重奏をした若い音楽家たちも幸太郎の異常の現場を

目の当たりにした。紗枝子も幸太郎のチェロがプロとして通用しなくなりつつあることを認めているように見える。誰もあからさまには言わないが、幸太郎の演奏の変化は紛れもない事実である。「ファンの集い」での発言も、暖かい言葉遣いではあったが、言っていることは同じなのだ。幸太郎自身も、むしろ誰よりも早くから気が付いていたのだが、なかなか自分の中で認めたくなかったただけなのかもしれな

い。

人間ドックで脳梗塞が見つかったことで、例えそれが小さいものでも高度で繊細な作業である楽器の演奏に影響を及ぼすことは十分に考えられる。実際に現在の幸太郎の状態は、趣味としてチェロを弾く分には、まだまだ非常に上手いアマチュアとしてなら十分に音楽生活を楽しめるが、プロとして人々に音楽を提供する者としては、上手いアマチュアでは

役に立たない。幸太郎はその辺のことは充分にわきまえている。

痛くも痒くもない、退屈な入院生活では考える時間だけは嫌というほどある。幸太郎は引退を現実のこととして考え始めた。半年ほど先に弦楽四重奏の演奏会が予定されている。芸大時代に四重奏をしていた仲間達が集まってお互いの長年の活動を祝い合おうというものだ。《半世紀を飛び越えた四重奏》と

銘打つて、すでにチラシの準備も始まつている。その仲間達は、それぞれの立場で今も立派に活動している連中だ。特にファースト・バイオリンを弾く男は、日本を代表するオーケストラのコンサートマスターを長く務めてから退団し、その後もソリストとして全国を飛び回っている。

幸太郎は、そのコンサートも中止しなければならぬかと思ひ始めていた。幸いに準備は始めている

が、チラシの印刷はまだだし、チケットも売り出し前だ。

見舞いに来た紗枝子にそのことを言うと、彼女はむしろホツとした表情を見せた。そして、

「一緒に旅行しましょう。それくらいのお金はあるのだし」

「そうしようか。ここを無事出られたらだがね」

幸太郎はもちろん無事退院した。病状はどれくらい改善したのかはつきりしないままだった。それでも病院で引退を決意した幸太郎は、半年後の四重奏の演奏会のための会場、そして一年後の自分の定期演奏会のために予約してあった会場をキャンセルした。また依頼されていたこまごました演奏もすべて鄭重に辞退したのだった。幸太郎は、引退というものがどのようなにして自分にやって来るのか想像した

ことがなかつた。いろいろな演奏会をキャンセルし、その関係者に事情を説明して、謝罪などしながら、『これが引退というものなのか』と初めて実感するのだった。それらのキャンセルで、幸太郎は想像以上に気持ちが悪くなったと思つた。ただ続けたいと思つている何人かの個人レッスンは残した。

問題は瀬野がピアニストを紹介すると言つた三カ月後のコンサートである。満足な演奏ができないだ



ろうことは覚悟の上で、幸太郎としては自身のフア  
イナルコンサートとして、なんとか実現したいと考  
えた。それはある文化センターが主催する「わが街  
のミュージシャンたち」と称するシリーズで、クラ  
シックの演奏家だけでなく、毎回いろいろなジャン  
ルのミュージシャンが招かれている。幸太郎の出演  
は十年前に一度あつてから今度が二回目であつた。

瀬野に紹介されたというピアニストが幸太郎の家

にやつて来た。前山田緑という若くて感じのいい女性だった。退院後熱心に練習してきた幸太郎は、早速今度のコンサートの曲を合わせた。曲目は電話で伝えてあり、彼女がピアノ譜を持っていると言うので、幸太郎は誰かの伴奏を務めたことがあるのかと期待した。曲目はシューベルトの歌曲集《冬の旅》全二十四曲をチェロとピアノで演奏するもので、一部の曲はピアノの演奏に乗せて、チェロのメロディ

はなしで、歌詞だけを朗読するという珍しい企画である。朗読は紗枝子がすることになっている。紗枝子  
は人前で喋るのが好きで、このようなことには自信も  
も持っていた。

この曲のピアノは単なる伴奏ではなく、歌い手との  
完全な共同作業で成り立つものである。しかも今  
回は歌ではなく、歌詞のないチェロによる演奏であ  
る。チェリストはもちろんだが、ピアニストにも充

分な曲への理解と音楽性が求められる。器楽奏者の二人は、歌詞がないのに、音だけで聴衆に歌の内容を感じさせなければならぬ。このあまりにも有名な歌曲集は、聴衆の多くが一曲一曲の内容を知っているはずだ。それは演奏家にとってありがたいことでもあるが、いずれにしても曲の内容を髣髴とさせる演奏をしなくてはならない。

幸太郎は、前山田緑が、期待に反してこの曲の伴

奏をしたことがないと言うので、誰でも知っている第六曲の《菩提樹》から始めた。前山田緑の指から幸太郎が期待するような音楽は流れ出てこなかった。初めてなので緊張しているのだろうと思って、比較的わかりやすい曲から何曲かを練習した。ピアノの技術は悪くない。彼女は、瀬野から《冬の旅》のことは聞いていたので、CDを何度も聞いたし、幸太郎のところに来るまでに、たまたま東京であった《冬

の旅のコンサートをわざわざ聞きに行つたと言う。幸太郎は、音楽的には瀬野と格段の差を感じたが、彼女の一生懸命な取り組みを評価して共演することに決めた。

試験結果を聞くように緊張して、「じゃ、こんな調子でよろしくお願いします」と言う幸太郎の言葉を聞いた瞬間の、ホツとしたような彼女の表情は本当に愛らしかった。

この人の感じの良さは、演奏の未熟さを少しはカバーしてくれるだろうと、幸太郎はさもしい気持ちにもなった。

前山田緑は、幸太郎のところに来るのに新幹線を三十分乗って来るのだが、コンサートまでの全ての時間をこれのために当てると言って、幸太郎を感激させた。幸太郎は、初めのうちは週一回、二ヶ月目からは週二回の合わせをした。瀬野とだったらこん

なに多くは合わせないが、幸太郎は自分の練習のためにも多くの回数が必要だったのだ。前山田緑との《冬の旅》では、チェロは歌曲のパートを何の脚色も無くそのまま弾くので技巧的な部分は無く、ゆったりと歌う場面が殆どで、特に問題は無い。

前田山緑は回を追うごとに雰囲気をつんだいい演奏をするようになっていくが、幸太郎は表現するのは問題ないし、前山田緑に音楽的な内容を指導する



のも問題なかった。ただ一つだけ問題は、何度練習しても幸太郎自身間違いが無くならないのだ。いろいろな箇所を決めている指使いが意識から飛んでしまつて間違つた音になつてしまつたり、躓いてしまつたりするのだ。そんなことはいちいち意識しなくても、自然に出来ることだし、特に今回は技巧的なところはまつたくなかないと言つていい。それがまるで始めたばかりの初心者のような間違いをするのだ。

幸太郎が間違ふたびに前山田緑は笑顔を絶やさな  
いで待つてくれるのだつた。いつの間にか前山田緑は、  
いらいらする幸太郎の慰め役になつてさへいた。

これでは心配しなければならぬのは、前山田緑  
のピアノではなく自分の方だと幸太郎は思い始めて  
いた。幸太郎は密かに脳梗塞との関連を考えないで  
はいられなかつた。これではチェロとピアノの曲よ  
りも、ピアノと朗読の曲の方がましかも知れない。

幸太郎は五曲あつた朗読の曲を七曲に増やした。

『いずれにしても最後の演奏なんだから、諦めずにがんばろう』と、幸太郎はあらためて決意するのだつた。

本番まで四日という日の夜、長く根をつめた練習のあつた日の夕食の最中に、二度目の梗塞が幸太郎を襲つた。救急車で病院に運ばれ直ぐに処置されたためか、単なる幸運のためか幸太郎に目立つた後遺

症は無かった。

紗枝子から知らせを聞いて、翌日駆けつけた前山田緑は幸太郎の手を取って涙を流した。そのように心配してくれる前山田緑に、幸太郎は呂律のはつきりした言葉で礼を言った。そして、コンサートは中止しないで、ピアノと朗読だけで《冬の旅》全曲をする形で、決行したい旨を、文化センターに自ら電話した。文化センターもあまりにも急なことだし、

幸太郎自身の要望なので申し出を受け入れた。

今度は紗枝子の残り十七曲の朗読練習の特訓が始まった。それには前山田緑も泊まりこみで付き合った。

幸いに幸太郎の容態は安定していて、傍目にはチエロを弾くことさえ出来るのではないかと思えるくらいだった。このぶんだとコンサートの当日外出許可が出せるかもしれないと院長が請合った。紗枝子

と前山田緑は練習の合間に、幸太郎を見舞って、進捗状況を報告し、それぞれの曲の解釈について幸太郎のアドバイスを受けた。

コンサートの日、幸太郎に外出許可は出なかった。コンサートの終わるまで、幸太郎は緊張が解けなかった。夜遅く病院に立ち寄った紗枝子と前山田緑から、上手くいったことを聞いてやっと安堵したのだ。

本番の直前まで懸命に共同作業をしてきた前山田緑は、幸太郎の前から去っていく。後には、脳梗塞の夫を抱えることになった紗枝子と幸太郎が残った。その夜、前山田緑が幸太郎の家に泊まる為に先に帰って行った後も、紗枝子は残って長い時間幸太郎のベッドの傍に座っていた。

幸太郎は、《冬の旅》の二十四曲の歌詞はもちろん

のこととそれぞれのタイトルさえも思い出せなくなっていた。文化センターに電話したときは流暢だと思つた言葉も、よく聞くと呂律がおかしいところが出てきた。今度の入院は二週間ではすみそうにない。幸太郎は、紗枝子が病院に縛られないでできるだけ自分の時間を大切にするように望んだ。幸太郎は二三泊の旅行でもしたらどうかと言つたが、言われた方は、「はい」と言つて出かけられるわけも無い。



幸太郎は、こんどこそ全てを失ったと感じた。紗枝子に病院なんか縛られるなど言っておきながら、二日も姿を見せないと寂しさを感じた。

幸太郎はどんどん言葉を失っていくのを実感していた。散歩で上がった屋上から真下を見ると、このままここから落ちたら全てがご破算にできると考えたりもするのだった。

文化センターのコンサートに出演しなかったこと

で、幸太郎は一生の友だった音楽を失った。紗枝子はCDを持ってこようかと言ったが、幸太郎は音楽が聞きたくなかったので紗枝子の申し出を断った。

病院のドクターも看護師も親切に世話をしてくれるが所詮仕事としてやっているのである。自分が荒野に一人いるような寂しさを感じることも多くなつた。

点滴その他の数々あることを何人もの看護師が入

れ代わり立ち代わり、幸太郎に優しく声を掛けながらきてきぱきとこなしていく。

その中に一人、知的な美しさの看護師がいた。もちろん彼女も仕事として幸太郎に優しく声を掛けるのだろうが、幸太郎は彼女の笑顔が心から出ているように感じて慰められるのだった。やがて幸太郎は彼女が来るのを心待ちにするようになっていた。彼女が来た日は一日調子が良かった。何日かぶりに回

つてくると、

「お変わりありませんか」

とホツとするような笑顔を見せる。何も無い荒野を照らす光のようであつた。紗枝子も彼女のことを

「感じのいい看護婦さんね」と褒めた。

幸太郎は入院中にも何度か脳梗塞を起こして、だんだん見るものの全てが漠然とした認識しかなくなつ

てくるのを自覚していた。視力がなくなつたのではなく、見えているのだが見た対象が何なのか、誰なのか判然としないのである。紗枝子でさえも、何となく見たことがある人だが誰だったろうかと言う感じなのだ。普通の人が誰かの名前を度忘れして、思い出そうとすればするほど記憶が奥の方に逃げてしまふような歯がゆさをすべてのものに感じるようになってしまった。例にお気に入りの看護師も靄の中

でぼんやり光っているような感じで、他の看護師との区別がいまひとつはつきりしなくなつていった。

誰かが傍に来て話しかけると、声は聞えるが頭の中がワンワンするだけで意味が聞き取れない。それに対して幸太郎は

「アーツガーツ」

などと意味不明の大声を出すだけである。

食事は介護師がスプーンで口に運んでくれるもの

を、大口を開けて食べる。口のまわりからはダラダラこぼす。勿論着替えや下の世話も全て介護師にやってもらおう状態になつていった。

ベートーヴェンの難しい曲を鮮やかに弾いた幸太郎と、現在の幸太郎との格差は、到底同一人物であるとは信じ難いものであつた。もし幸太郎本人がこの状況を理解できたら、どう考えるだろう。おそらく尊厳を大きく傷つけられて、生きていたくないと

考えるに違いない。

紗枝子も急激に変化した幸太郎の状況に、自分の人生も終わったような大きな衝撃を受けていた。医師達はもはやこの状態から、何とか普通の生活に戻らないだろうかという紗枝子の願いを否定した。しかし紗枝子はあまり後ろを振り返らない性格である。こうなってしまった以上は、今の幸太郎を受け入れてありのまま生きていくことを考え始めた。これ



も五十年以上共に生きて来た二人の人生の一部なのだと考えた。

まもなく、幸太郎は急性期の病院から介護施設に転院した。紗枝子は出来るときには自ら幸太郎の口に食事を運ぶ役割を買って出た。幸太郎が元気だったころ、クララ・シューマンの夫ロベルト・シューマンが精神病院で生死の間をさまよっているときに

も、コンサートに奔走していたことを、自分達もあのようでありたいと言ったことがあった。しかし、紗枝子は自分にはコンサートも何もやり続けなくてはならないような仕事は無いのだから、クララの真似はできないと思った。しかし、こうして自分が幸太郎のそばにベツタリと着いているのを、幸太郎はきつと喜ばないだろうことはわかっていた。

しかしその期間は一年ほどで終わりになった。幸

太郎は急速に枯れていくように衰弱し、やがて息を  
引き取ったのだった。死の枕元には危篤を知って駆  
けつけた前山田緑と紗枝子がいた。死の床にピアノ  
ストの前山田緑がいたことは、一緒にコンサートを  
することは出来なくなっていたが、若山幸太郎が専  
門の音楽家だったことの唯一の証であつた。

紗枝子は、寝たきりでもいいから生きていて欲し  
いと願う一方で、この状態から早く幸太郎を解放さ

せたいと願う気持ちもあつた。死別はもちろん寂しかったが、むしろ幸太郎のためにホツとしたという方が強かつたかもしれない。

葬儀には、瀬野も参列して、紗枝子に丁寧に頭を下げた。紗枝子に瀬野を憎む気持ちはなかつた。葬儀に珍しい参列者がいた。紗枝子と同年輩と思われる女性が、紗枝子の前に来て悔やみを言った後、じつと紗枝子の顔を見ている。そして、

「わかるはずないわね。宝光子って言ったらおわかりかしら」

紗枝子はこの女性の顔には覚えがなかったが、その何ともありがたい名前に覚えがあつた。

「もしかしたら、芸大の？」

「そう」

「あつ、フルートね？」

紗枝子はこの女性とは芸大の同期生で、フルート

の卒業試験のピアノ伴奏を頼まれて引き受けたことがあつた。何かやややこしい現代曲で苦勞したことを思い出した。

「あのとときの！思い出しました。でもどうして今日？」

「私、いまは三輪といますが、実は主人の仕事の関係でいま市内に住んでいるんですよ。紗枝子さんが大学の先輩のチェリストさんと大恋愛をして、卒

業と同時に結婚して外国に行つちやつたことは、当時大学で誰一人知らない人はいなかつたでしよ。それで新聞のお悔やみ欄を見て、もしかしたらと思つて来てみたら、やっぱりそうだったの」

紗枝子と三輪という女性との、昔の同級生に出会った女学生のような調子の会話に、周囲が違和感を持って振り返ったが、夫を亡くしたばかりとはいえ、紗枝子が笑顔を見せていることに参列者達は救われ

るような気持ちになつたのだつた。

葬儀から一月ほど経つたころ、三輪光子が紗枝子を訪ねてきた。紗枝子は彼女がフルートを持っていて、ことに直ぐ気付いた。まだ白い布に包まれた骨箱の前の遺影に供え物を置いて手を合わせると、光子は目を輝かせて紗枝子に話しかけようとした。紗枝子はその光子を応接間に誘つた。紗枝子も光子と話



したかったのだ。

二人はひとしきり芸大時代の話をした後、光子はフルートを出した。

「今も吹いてらっしやるの？」

「とんでもない。吹いていたのは学校卒業して五年くらいだけ。今日、急に思いついて持ってきてみたの。不謹慎だったかしら」

と言って、光子は肩をすぼめて笑った。昔から弦楽

器の人に比べて管楽器の人は陽気だったのを紗枝子は思い出した。光子は、

「でも、何十年もよく腐ってしまわずにあつたものだよ。でも長いこと姪に貸していたので、彼女綺麗に手入れしてきてくれたせいね」

「姪御さん、専門にやってらっしゃるの？」

「高校のブラスバンドで吹いていただけですけど、市民オーケストラに入るので貸してって言って来て

ね。高校では学校の楽器だったらしいの。最近になって自分のを買ったので返してくれたの」

こんな話をしているうちに二人は演奏してみたくなって、光子が用意していた譜面で、フォーレの《シチリアーノ》を弾くことになった。紗枝子は、一年以上前の「ファンの集い」で幸太郎の伴奏をしてからピアノに触っていなかった。光子も

「音出るかしら」

と言いながら楽器に唇を当てた。さすがに芸大出だけあって、ちゃんと吹くではないか。そしてこの曲は、幸太郎が瀬野と演奏した、アンコール以外では最後の曲でもある。紗枝子はチェロで弾く《シチリアーノ》も好きだったが、フルートのそれは青空に飛んでいくような清々しさがある。短い曲だが二人は何度も《シチリアーノ》を繰り返して楽しんだ。それ以外の曲もあると言って光子が持って来ていた

楽譜を出したが、それを見て二人とも、

「すぐには出来そうもないわね」

と諦めた。光子は

「あー、息が切れる」

と言いながらも、目が輝いていた。紗枝子にとつてもこのような楽しい時間は本当に久しぶりだった。

二人は合奏を終えコーヒーを飲みながら、

「卒業演奏のときのややこしい曲、あれ何だった

の？」

などともうひとしきり話に花を咲かせてから、光子は帰って行った。帰り際に二人は、

「近いうちに必ずまた合奏しましょうね」と約束したのだった。

(了)

\*この物語はすべてフィクションであり、登場する

人物その他はすべて架空のものです。

## 編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア



としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな  
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同  
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣  
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。  
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中  
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう  
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの  
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))  
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

## 著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も  
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた  
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴  
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの  
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら  
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。  
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

## 今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

### 既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞



コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

## 既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

## 紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

## 短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

## 12 カルテット

## 最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語



Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

---

## 野の寂しさ

---

2022年9月20日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：[www.photo-ac.com](http://www.photo-ac.com)

タイトル：兵庫県 砥峰高原 秋 ススキ

作者：SAMSUMさん

写真のID：3977047

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>

---